

第7章 関係遺跡の資料

附1. 桜ヶ岡遺跡出土遺物について（北原熟コレクション、須恵器、中世須恵質陶器、第33図・附1表）

原村字桜ヶ岡（水田）の出土遺物は小国町資料館に保存されているが、柱材なども出土している。細部の状況については不明であるが、『原集落史』によれば、昭和35年（1960）耕地整理が行われ、須恵器など遺物が出たが、開田工事が優先の食料生産時代であった。翌春雪消えの中から採集された遺物が、資料館展示品であり、第33図掲載の遺物である。從って遺構等については不明である。現在も水田耕土中から遺物を採

附1表 「桜ヶ岡遺跡」出土遺物観察表

No.	所属年代	法量			胎土特色	技法その他特色
		口径cm	器高cm	器厚cm		
1	中世	13.8	残 4.5	0.8	灰黒色、精土、焼成良好、頸部横描波状文3条単位、波状間隔は10cmである。壺型土器	
2	"	11.0	4.0	1.1	灰白色、砂質、焼成良好、内外面共に横撫で調整、壺型土器	
3	"	-	3.5	1.3	灰白色、精土、焼成良好、ロクロ横撫調整、窯印様の十字状と痕跡が現われるが不明	
4	"	-	7.0	1.8	灰黒色、細砂粒混入、焼成良好、外面自然釉、横位細沈線叩文、内面横撫調整	
5	"	推 25.5	6.7	1.0	青灰色、精土、焼成良好、ロクロ横撫で調整、浅鉢型土器と思われる	
6	"	-	6.7	1.5	灰黒色、精土、焼成良好、斜条線叩繩調整、内面手掌当底、撫で整形	
7	"	-	4.4	0.9	青灰色、精土、焼成火ぶくれ破裂痕内面にみられる。斜条叩目模を形成	
8	"	-	7.3	1.5	暗灰色、精土、焼成やや甘い、斜条線叩繩調整、内面撫で調整	
9	"	-	5.5	1.0	青灰色、精土、焼成良好、斜条線叩繩調整、内面撫で調整7と同一個体か	
10	"	-	4.5	1.1	青黒色、精土、焼成良好、斜条線叩繩、内面手掌当底撫で調整	
11	"	-	6.0	1.3	青灰色、精土、焼成良好、斜条線叩繩、内面横撫で調整	
12	"	-	4.0	1.6	灰白色、胎土や粗い、焼成やや甘い、斜条線叩繩、内面横撫で調整	
13	"	-	4.2	0.9	青灰色、精土、焼成良好、斜条線叩繩、内面火ぶくれ破裂痕あり、7・9と同一個体か	
14	"	-	4.5	1.0	青灰色、精土、焼成良好、斜条線叩繩、内面横撫で調整、内・外共ビッヂ附着	
15	平安時代	-	5.2	0.5	青黒色、白色珪石粒合む、焼成良好、外面格子目叩調整後カキメ、内面同心円文当底、薄手土器	
16	"	-	6.5	0.9	暗灰色、精土、焼成堅い、内外共に細い格子目叩繩、内面さらに同心円文当底裏、外面磨滅痕	
17	"	-	1.3	底径推 7.0	青灰色、砂粒混入、焼成良好、ロクロ撫で整形、内面暗褐色、自然釉、外面上端部にカキメ調整痕、壺型土器	
18	中世 (南北朝期)	-	7.3	底径推 12.0	黄灰色精土、焼成はやや甘い、渦巻状に撫で仕上げ後撫目は幅2cmに11条単位と1cmに6条単位がある。計8単位、外面底部の一部にも備状工具の捺痕がみられる。底部は静止糸切技法か底部立上がり部に指頭痕が2ヶ所ある。撫鉢底部	
19	中世 (南北朝期)	-	3.0	底径 15.8	暗青灰色砂質土、焼成やや甘い、ロクロ横撫で仕上、残存部位が少なく、特徴は不明である。使用による磨耗か荒れが進み擦目も不確である。底部には布目と思われる痕跡がある。撫鉢底部	



第33図 原「桜ヶ岡遺跡」(北原歯コレクション 須恵器・中世須恵陶器) 実測図

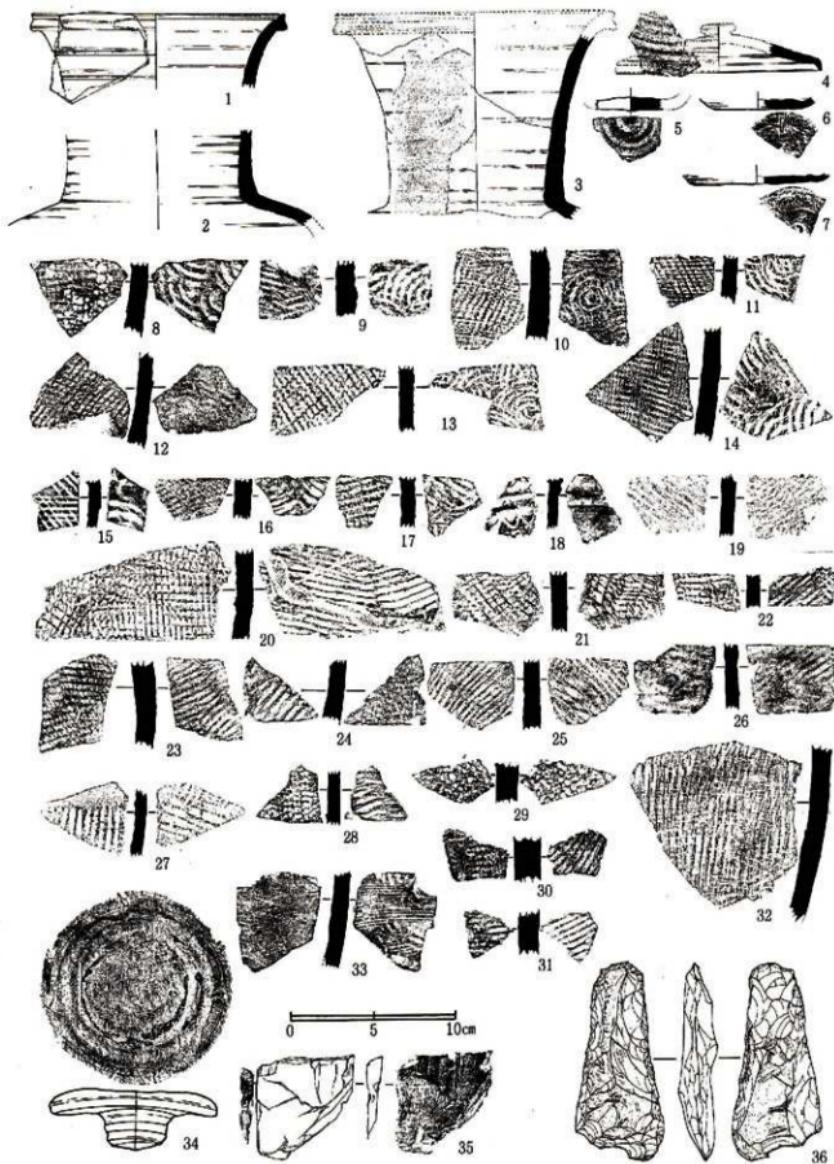
集することができる。原城跡（山城）の居館跡であった可能性も考慮され、しかも須恵器が採集されることから図の15～17の須恵器（平安時代）を伴った複合遺跡である。1～14、18・19は中世陶質土器で、摺鉢の特徴からみて南北朝期14世紀前半期の遺物と思われる。

附2. 原小屋居平遺跡探集の遺物について（湯本昭男コレクション、須恵器、第34図・附2表）

大字千谷沢字原小屋居平138番（畑・宅地）に所在する該遺跡は、以前から家の改築時に出土していたという。近年留意して採集した遺物は須恵器がほとんどで40点余、土師器5点（細片のため掲載しなかった）、砥石1点、縄文時代の打製石斧1点を確認した。原小屋居平段丘面は、濱海川右岸にあり、標高64mで主要地方道長岡小国松代線に隣接している。「御館遺跡」（千谷沢駿之島居平・平安時代掘立柱建物遺跡、9世紀後半～10世紀）の南南西方向750m程に位置している。採集遺物の編年は細片ばかりで困難であるが、図版中1の長頸壺型須恵器は胎土・手法・形態などから9世紀前葉まで遡るものと判断される。

附2表 「原小屋居平遺跡」出土の遺物観察表

No.	所属年代	法量			胎土特色	技法その他特色
		口径cm	高さcm	器厚		
1	長 頸 壺	推 15.4	残 4.5	0.8	暗灰色、芯部暗茶褐色或堅い、外面部青黒色、内面部灰茶褐色灰帶、口縁部外反しながら内面が直立し外縁は強く張り出している。	
2	長 頸 壺	頸径 8.5	残 5.5	0.9	肩最大径15.5を測る長頸壺、灰黒色、砂質或堅い、外面部灰茶褐色火ぶくれ破裂痕多、横擗調整に素焼後火燐による煤と消耗が多い。	
3	長 頸 壺	推 17.0	11.2	1.2	紅茶褐色芯十、白色粒含む、内外部共灰白色、横擗で調整、人型長頸壺型土器、焼成は堅い。	
4	坏 蓋	推 12.5	推 2.2	0.6	灰白色砂質土燒成堅い、ロクロ整形波状なで調整、口縁端部はやや外側につまみだしている。	
5	坏 底 部	推 5.5	—	0.7	暗青灰色精土、焼成堅い、底部面のみ、麓切り技法	
6	坏 底 部	推 5.5	残 0.6	0.5	暗青灰色精土、焼成堅い、ロクロ挽き、底部麓切技法、内面汚れ	
7	坏 底 部	推 8.0	残 0.5	0.4	暗青灰色精土、焼成堅い、ロクロ挽き、底部麓切技法	
8	甕 形	—	残 4.0	1.0	紅茶褐色灰被黑色化、火ぶくれ破裂痕、焼成堅い、内面同心円文当具痕	
9	甕 形	—	3.0	1.3	暗灰色砂質燒成甘い、内外部共に条線状叩撻調整している。25は暗灰色を呈し胎土は精良で焼成は極堅い。内外共条線状叩撻め、26は青灰色精土で焼成は良好である。	
10	甕 形	—	—	—	青黒色～暗灰色を呈し胎土は精良。焼成は大概良好で、14は堅い。外面は格子状叩撻め整形を施し、内面は同心円文の当具が使われている。	
11	13・14・15・17	—	—	—	暗灰色を呈し、胎土は青灰色を呈す12・32は、墨茎器を含む15、白然釉が12・15でみられ焼成は堅い。31・32は焼成が甘い。外而条線状叩撻めに対し、内面は同心円文当具が使われる。	
12	甕 形	—	—	—	青灰色精土、焼成は良好、ロクロ挽き、底部麓切技法	
15・31・32	—	—	—	—	—	—
20	甕 形	—	—	—	青灰色～暗灰色を呈し、胎土は精良。30は砂粒を含み、20は焼成が堅く、他も大概良好である。休部外表面が格子状叩撻め調整し、内面が条線状当具が使用されている。20の内面に布目（絞糸）疵痕がある。	
22・24・28・30	—	—	—	—	—	—
18	不 詳	—	3.0	0.5	青灰色精土、焼成は良好、外面2条の隆帯下に2条の波状沈線、内面1条隆帯の下方は刷毛目調整	
19	甕 形	—	3.5	0.8	暗灰色精土、焼成は甘い、内外共に灰黒色化、外面斜条線叩撻、内面は細かな同心円文当具	
21	甕 形	—	残 3.5	0.8	暗灰色精土、焼成は良好、内外共に格子状叩撻、当具による調整がみられる。	
27	甕 形	—	4.0	0.7	灰白色、白色粒含む、焼成極堅い、外面格子状叩撻後撫で消し滑光沢あり、内面条線状当具痕	
29	甕 形	—	2.2	1.2	灰白色燒成良好、表面共に不整然格子状叩撻痕が伺われる。	
33	甕 形	—	5.7	0.9	青灰色精土、焼成良好、外而横撻でろき後刷毛目、内面は同心円文当具調整後カキモ拭	
34	蓋 形	10.5	3.5	厚さ 2.4	赤褐色胎土は砂質で荒目、天部は糸切痕に撻で調整で、仕上げは荒い。焼成に疵がある。瓣み状の柄部の径は3.8cmを測り、ロクロ仕上げの折縫が満巣状をなしている。	
35	砥 右	残長 6.0	幅 5.8	厚さ 1.0	灰綠色板岩、表面が研磨がみられ一部剥離、裏面は切出し剥離痕のままである。	
36	打製 石 斧	長さ 11.8	幅 5.5	厚さ 2.0	黄白色粘岩岩質、楔形の縄文時代の石斧、刃部は欠損部がある。丁寧な作成である。	



第34図 千谷沢「原小屋居平遺跡」(湯本昭男コレクション、須恵器・砥石・縄文石斧) 大割図

掲載しなかった細片もあり、なおこれからも採集される可能性のある遺跡である。土師器片は5点あるが細片のため掲載しなかった。坏底部の一部が2点、赤黄褐色胎土で1点は灯明皿に使用されたものと思われる。他は甕形土器の体部と思われる。

須恵器の製作技法の叩締痕は多様であり、特色を持った遺物である。

附3. 小丸山中世墳墓について（新規遺跡の発見）（第35・36図）

「小丸山中世墓址」遺跡は、大字小国沢字才の神（通称小丸山）にある。昔から太郎丸で柴伐山として身代してきた。昭和15年（1940）当時尋小高等科の生徒・青年団員によって、小丸山の開墾が行なわれた。夏の暑さで熱射病で倒れる者もあったという。開墾中に土鰐頭が2・3あった、墓石もあったと記憶され、崖から転がし落したとも記憶しているが、それ以上の詮索はなかった。

畑耕作をしていた（武左エ門家）によって採集された渡来古銭①皇宋通宝1枚があった。これが公表されたのは『小国地史考 第一集 小国の神社』（昭和61年4月11日発表）小国沢出身の小松正淑（町田市在住）であった。古銭は鉛筆による拓影のリプリントである。さらに畑の畦畔に堆積状況に除けられていた宝筐印塔の残缺について説述されていた（自筆抜訂本）。同書において宝筐印塔は五輪塔と見做している。現在古銭は採集者が仕舞場所を忘れて所在が不明である。宝筐印塔は町教委によって資料館に収納し、展示公開している。

「浦田遺跡」の平安時代の遺跡・遺物、土葬墓群の関連、裏付けの資料を探って小国町全域の墓地巡査と若干の動き取り調査を実施し、なお浦田遺跡調査に参加された方々の話題から「小丸山墓址」遺跡の確認ができた（調査98年4月1・8日の2日間）。第1に小丸山の地形は、わずか東西100m余、南北45m～20mの小丘地（標高100m）で、北側は急崖をなして比高約10m、東側の狭い端は4m程の切崩崖で、小国沢集落の共同墓地である。南側は5.6m～7.8mの崖をなし、幅約10mの溝状低湿地でかつて水田耕作地である。西側は比高約10m傾斜下は水田（現在土建業資材置場など）であった所で、この沢をタッチュウ沢と呼称し、対岸（同レベル段丘面）は曹洞宗真福寺境内である。

99年春馬鈴薯栽培の手入れをしていた小林春子は、渡来古銭1枚②（開元通寶）を採集した（拓影2）。さらに6月に入って耕作者佐藤信二は、畑の畦畔など整理中、表土下10cm位で石を鍬で叩いた。ために掘り起した所、宝筐印塔の塔身部（18×18×14.5cm、黄灰色凝灰岩製）が出た。さらに北側へ4mほど離れた場所かららは、相輪の基部（残長21、最大径13cm、納組式、黄灰色凝灰岩製）残缺などが出土したと知らせを受けた。6月17日、8月1日の2回にわたる表面採集と調査を実施し、畑耕作による遺物発見現場の実測を行った（第35図）。なお佐藤信二是耕作中渡来古銭③「景祐元寶」を表探した（拓影3）。さらに調査員池田は、その後石仏調査のおり（平成13年6月22日）畑の表面採集を行った。わずか1.5cmの細片に④「開」字と思われる破銭貨を採集した。おそらく「開元通寶」と思われる（拓影4）。

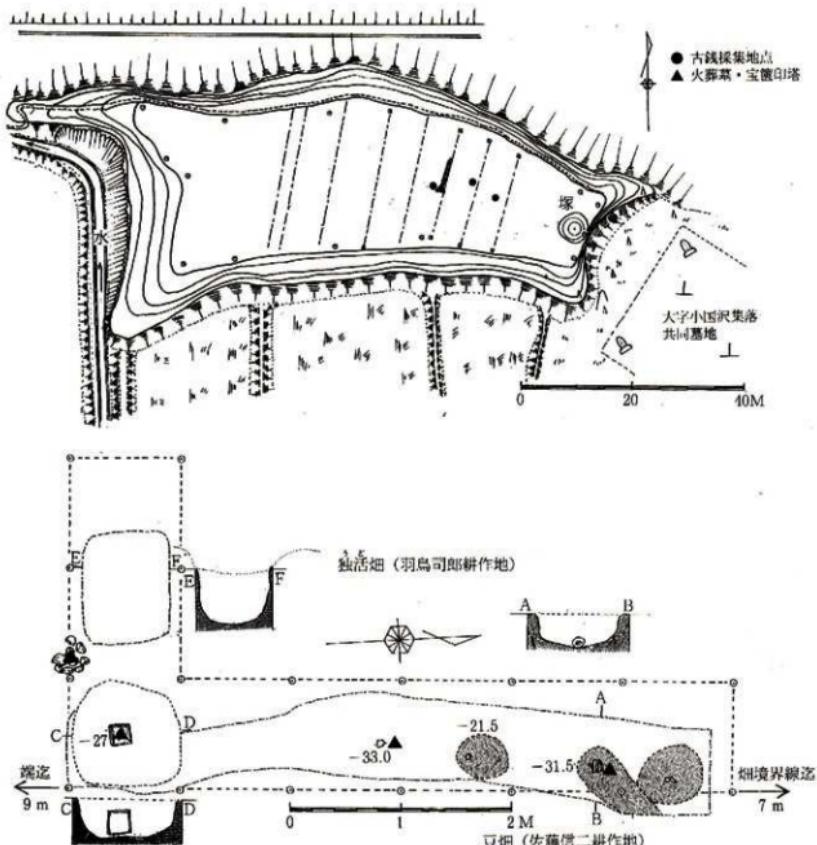
以上最初の畑の畔に放置された宝筐印塔残缺片、佐藤信二の鍬先にかかって発見された宝筐印塔残缺など10数点、渡来古銭4枚、及び第35図で示したように火葬再葬墓址（火葬骨少片）によって、小丸山が中世の皆遺跡であると同時に宝筐印塔の存在が確認され、重要な歴史的意義のある場所であることが判明した。笠部2基分、塔身部2基分、相輪部（石材の違い）2基分、基礎部（異質石材）1基分等の特徴からみて、室町時代すなわち戦国時代（15世紀中葉から後葉期）の武士階級の供養塔（再葬墓）として建てられたものであろう。

土橋古墓（第36図J）

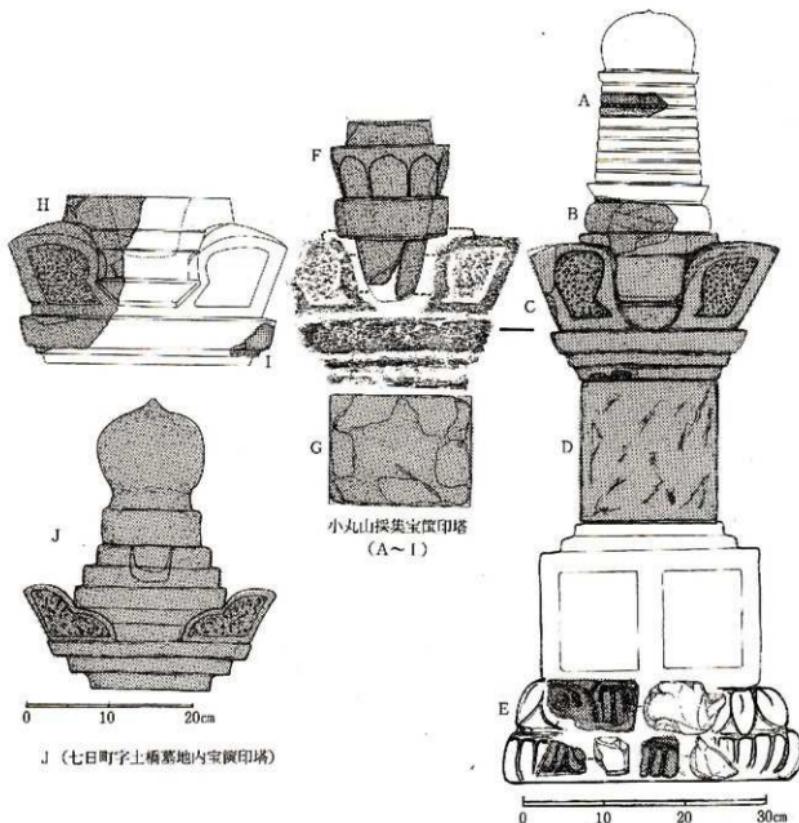
七日町新田の大坪川左岸の段丘上の墓地（宝珠院境内）内に宝幢印塔笠部が2基ある。1基逆位にしてコンクリート付けで計測調査できなかったが、上部の笠は隅飾りの最大幅30cm、高さ17.5cm、相輪は宝珠部が載っている（高さ18cm、径13.5cm）。笠の石材は暗灰色凝灰岩製である。下の台にされている笠も同一規格と思われる。形態的にはやや小丸山宝幢印塔よりも小振りで耳飾り角度は大きめである。この古墓は上栗の原巻宗家の1つカンゼンどん（原熊治家）の墓地だという。また屋号ウラ家の『尊基發誌』（原健治書・山崎正治調査資料による）によれば、延徳元年（1489）先祖原兵庫之助隆則が、名栗日原（現七口町）に転住してきたという。これが父のために建立した供養塔であろうか。

五輪塔3基（第37図）上栗の墓地（通称イナムキ）に3基の五輪塔がある。原一族の供養塔である。

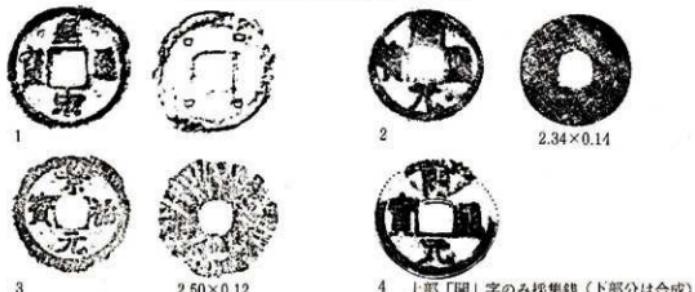
- （1）屋号インサ家五輪塔（原伊右エ門）（全長110cm、最大幅27cm）である。銘は「**為慶山道寿禪定門**
敬白 寛文七歳四月十六日」（1667）。なおこの碑は梵字の大日如來の真言「キャ・カ・ラ・バ・ア」（金剛



第35図 小丸山要塞と宝幢印塔採集墳墓跡概念図



小丸山塔墓採集の渡来古錢拓影（1～4）



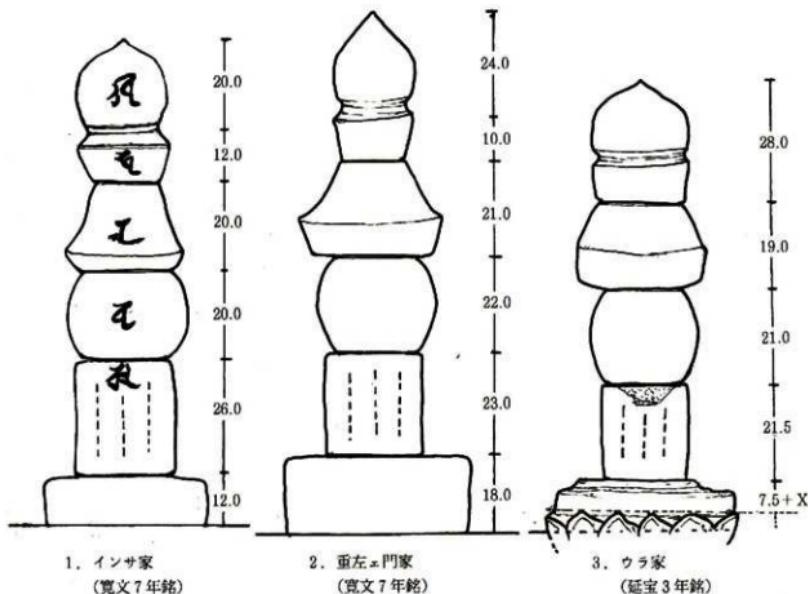
第36図 小丸山表接宝筐印塔残缺（A～I）と渡来錢拓影・七日町墓地宝筐印塔実測図

剛界)が刻まれている。

(2) この五輪塔は原巻、重左エ門家の墓であるが、大阪へ転住されたためにその系図は調査されていない。全長118cm、最大幅31cmである。銘は「圓室源昌禪定門 寛文七年巳未五月十日」の紀年銘である。

(3) は前記したウラ家(原健治)の五輪塔(全長100cm余、最大幅29cm)である。銘は「欠 靖祐山禪定門願主兵伍 延宝三年卯六月十二日」(1675)と読みとれる。

この3基は江戸時代前期の五輪塔で、3基とも特徴が各々である。また紀年銘のみられる地輪の高さが26・23・21.5cmで、横幅は23・22・19.5cmと高さよりも狭く、しかもさらに台座を加えているなど新らしさを示しているが、全体の風貌は中世室町時代の古い形式を示している。石工の系統が注目される石碑である。なお、以上3基の西側に笠塔婆型(全高120cm余)の墓塔がある(原宏平家)。4人の戒名が正面と両側面に刻まれている。正面で「寛永三年(1626)、享保三年(1718)」側面に「元文二年(1737)」がある。また武石村国沢の共同墓地には「元禄四年霜月十四日」(1691)銘の高橋家の五輪塔2基や大字八王子村の共同墓地には「元禄三年」の駒型の墓塔を確認した。紀年銘のある古碑である。



第37図 上栗墓地の古墓(供養塔)概念図

附4. 貞治6年銘、真福寺境内の自然石板碑について(新規発見・第38図)

太郎丸2421番、曹洞宗真福寺境内の歴代住山墓と並んで、杉の根方に寄り掛けられた自然石(河原転石、閃緑岩)を発見した(98年4月8日、山崎・池田)。長さ58cm、最大幅24cm、厚さ15cmを測る。長楕円形の面に「寺 山 貞治六年 [?] 月日 施主敬白」と鏽彫りされた中世に流行した板碑(自然石利用)である。

ことが判明した。年号については、千々和到氏（東大名誉教授・国学院大学教授）のご指導を頂き、貞治六年（1367）と解説した。

貞治6年の干支は「丁未」であるが、碑の刻字からは判読できないため疑問は残る。種子はバク・マン・アン（釈迦・普賢・文殊）の三尊佛である。追善供養との関わりの十三仏信仰による仏事では、釈迦如来は二七日（フタナヌカ）に宛られている。この板碑が真福寺に持ち込まれた経緯については不明であるが、小丸山にあったものか、あるいは延命寺ヶ原（塚・黒色土坑・刀子の出土等）から移されたものか、ないし太郎丸集落内の共同墓地以前の散在墓地・堂ノ下の堂地・旧寺跡など宗教的関連地区が考慮される。

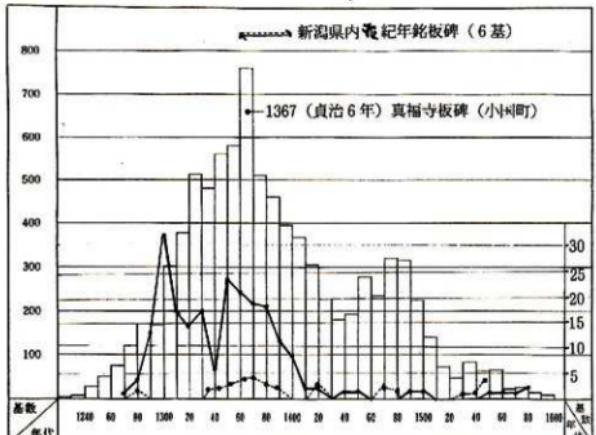
小丸山表採古銭は4枚だけであるが、町内で採集された各所の銭貨の時代分析を試みると、「坊屋敷」・「御館」は最新銭貨が「永樂通宝」（初鑄年は中国成祖帝の永樂6年（1408））である。我が國への流通時間を考慮しても珠州陶器VI期（15世紀後半）、船載陶器の青磁など（16世紀代）とされる（『御館』奥田、1985）の前後時代に比定されるのに対し、桐沢地区出土の銭貨・最新「洪武通宝」（初鑄年1368年）の14世紀中葉期に対し、小丸山古墓の六道銭4枚の内、最新銭貨である「皇宋通宝」（初鑄年1038年）は11世紀前半となる。もちろん概論にすぎない。

板碑自体の紀年銘「貞治6年・釈迦三尊」種子についての若干の考察を試みた。全国の板碑調査の傾向

附3表 町内各所遺跡出土銭貨分析表

	唐	後周	北宋	金	南宋	明	李氏朝鮮	合計	
原「坊屋敷出土古銭」 (北原 熊藏)	3	1	70	1	1	5		81	最新銭貨、永樂通宝 (1408年)
桐沢地区出土古銭 (山崎正治藏)			7			1		8	最新銭貨、洪武通宝 (1368年)
小丸山古墓出土古銭 (各個人所蔵)	2		2					4	最新銭貨、皇宋通宝 (1038年)
鷺之島「御館」出土古銭 (小国町教委蔵)			1			2		3	最新銭貨、永樂通宝 (1408年)

第15表 板碑発見年代分布表

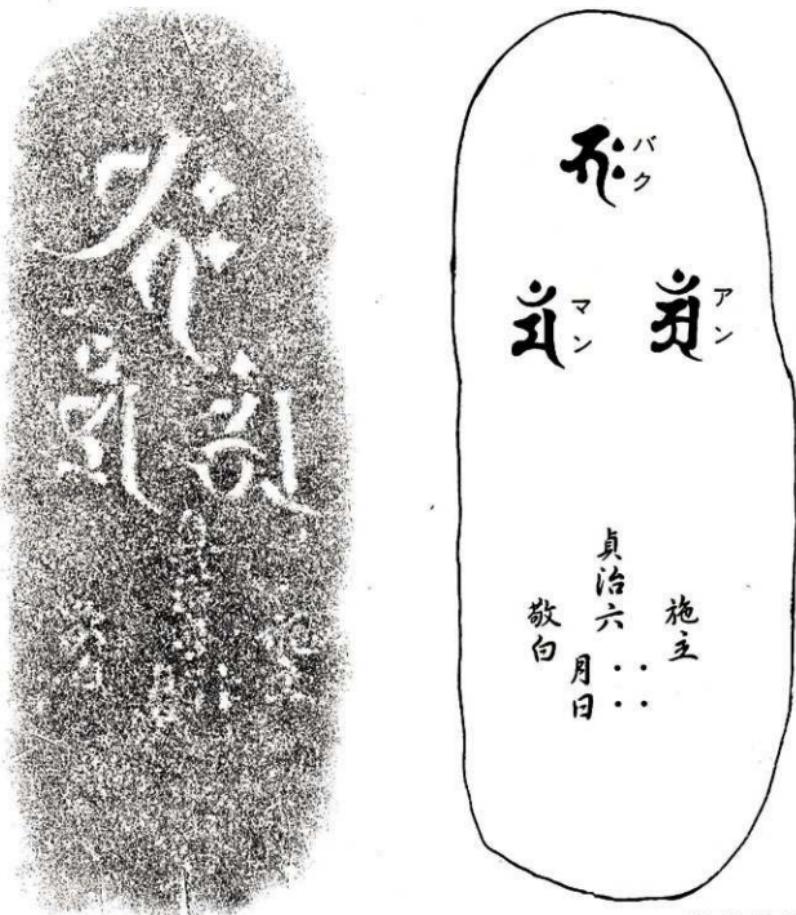


〔板碑〕 埼玉県調査会より (注) ▲釈迦三尊 △釈迦一尊種子紀年銘数
(2万基余)

(池田加筆作成)

〔板碑消滅考〕千々和実1977)、『板碑』埼玉県板石塔婆調査報告書(名著出版 1981)など、埼玉県内2万数百基の板碑資料を通してこの特徴を取上げると、全国的にも新潟県内板碑の状況からみても、板碑最盛期の14世紀第3四半期に位置し、小国保が全国レベルの中に位置していることを物語っている。なお自然石板碑は東北型の中に括られるが、その中で越後型とも呼称されるものの、河原転石にはほとんど何の装飾もないのが圧倒的な特徴であり、むしろ魚沼型板碑と称すべきものである。

貞治6年の歴史的背景をここで論ずる紙幅はない。「浦田遺跡」の発掘調査を通して略年表を携げて、附編1~4を位置付けることによって研究の資料に提言する。



(58×24×15cm)

第38図 真福寺境内の板碑拓影図(種子・軋迦三尊)

終章 「浦田遺跡」まとめの略年表

年代・時期	歴 史 事 項	参 考
縄文時代前期 中期～後期 ～晩期	関東編年、諸磯C式～十日町北原八幡遺跡など並行の前期後葉 (平行沈線に結節状浮線文とギターン状飾り突起の添付) 関東編年、安行3式～田上町保明浦遺跡、長岡藤橋遺跡など並行の晚期後葉 (三叉文、雲形文、浮線網状工字文、瘤状突起、平行沈線文、網状文、羽状 繩文などが特徴)	延命寺ヶ原遺跡 (町内遺跡数11)
平安時代 9C 前葉～中葉 9C中葉～ 10C前葉 長承2年(1133) 仁平3年(1153) 応保元年(1161) (注) 安元2年(1176)	千谷沢「原小屋居平遺跡」(須恵器・土師器、繩文石器1点) 造構等は不明(湿地帯の開発と低地住居) 「桜ヶ岡遺跡」、「浦田遺跡」鷺之島居平「御館遺跡」 (須恵器・土師器、御館遺跡は羅立柱建物の遺構も検出) 伝、源頼行～刈羽郡内に18000貫文の地を賜り、居を小国保に移して小国氏と称す。 伝、源頼行～弥彦荘内の一角に16500貫文の地を領有し館を(陣屋敷)構える。嫡子兵庫頭宗頼をおく。(保元2年(1157)7月頼行安芸国に配流、途中で自害する「兵範記」) 伝、小国小次郎なる者当村開発地主。從臣6人あり、「6人百姓」という。正治元年(99)91歳で卒す。 「村を去る3丁余東方の山に埋葬すと」 (小次郎…二郎を称する人物?・小国三郎二郎頼隆、兵庫頭小国又二郎頼村、兵庫頭小国二郎政光、小国二郎公頼…専尊分派) 伝、西蒲原郡下田郷の地を賜り、八木に館を築き、嫡子兵庫頭宗頼をもって守らす。: 嫡孫三郎頼連を石斎館におく。	湯本昭男所蔵 (段丘上面に所在) 小国町教委所蔵 北原歴所蔵 「西蒲原郡志」 「小国町史」 保元乱1156 平治乱1159 『小国沢地誌』 (小松正倫) 『尊卑分派』 『西蒲原郡志』 『小国町史』 (境川平氏滅亡1185)
中世(鎌倉) 菅野島ミササギ (以仁王) 建久5年(1190) (注) 建暦2年 (1212年正月11日)	國守一守護一地頭、仕官一地頭、「一所懸命」 伝、高倉宮以仁王の靈を祀った塚か。大塔宮護良親王の靈地か。 治承4年(1180)賴政宇治川の戦に敗れ自刃。夫人菖蒲前男子出生、6歳で元服し、小国吉政と改め下田城に赴く。(小国吉政-松ヶ嵩城=越後野志)。 幕府弓場始儀一射芸の報價=越前稲津保の地頭職を賜る。小国頼経。別名「小国三郎頼進」という。(小国源兵衛三郎頼進は源三位頼政の弟頼行の嫡孫という) ?「尊卑分派」は頼行の嫡孫。しながら父「左兵衛宗頼の嫡子」でないのか。	封建制度 『越後野志』 『温古之禁』 『小国町史』 『越佐史料』 『越佐史料』 『尊卑分派』 『小国町史』
建長元(1249) 宝治4(1250) 建長7(1255) 小国の伝説 (注)	小国源太郎左衛門盛光と源兵衛右衛門頼盛の兄弟は鎌倉北条軍に敗れて、小国谷中村で自刃した。男子3人あり、菩提寺盛光寺(真言宗)を創建した。盛光寺社合殿、十二社(大山祇命 宝治4年2月勅請) 八王子神社～中村の祖先が勅請した。 ①旧千谷沢村皆沼は、蘿原氏の後裔が住した所、釜で飯を炊かず、胡麻を作らない。 ②七日町村、堂塚山の長者伝説～馬になった長者は財宝を埋蔵、ある日足に朱を付けてきた(朱慶伝説)。 ③中山大納言(藤原北家花山院流)終焉の地に角塔婆を建てよ、と。(小坂集落北外れ) ④鶴ノ平(鷺之島) 浪速川に鶴は「白山大権現の使鳥」として保護した。 千谷沢村枝、小坂山の頂に3町歩程の古城跡あり、小国源三郎頼連の族源藏頼通居城、小坂氏と称す。	『小国町史』 足利義尚懸造死 諏訪神社上の墓 『越後名寄』
正応3(1290) 永仁4(1296) 德治元(1306) 南北朝(1333) 建武2(1335) 延元2(1337) (建武4) *	「社領並社人知行覧」に小国彦七の名がある(弥彦文書)。 小柴山城東麓、字北野に小国神社(元下源祐社)を北原安兵家の勅請と伝える。太郎丸斯淳海神社(少彦名命)を京都五叢大神より勅請という『小国町村郷土誌』。 鎌倉幕府が滅び、後醍醐天皇建武新政(34)…失敗 小国兵庫助政光は蒲原津に築城、北朝方と戦う。 政光等宮方は船泊で北軍と戦う、4/16蒲原津城に籠る。北朝方上杉憲顯は憲房の跡を繼ぎ上野守護であった。越後・下野へ転戦し、5月越後へ。	『西蒲原郡志』 『小国町史』 吉野・京都 『越佐史料』

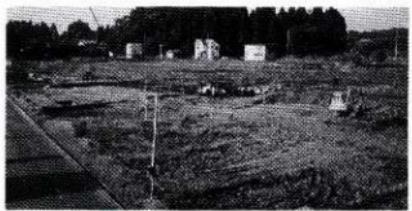
年代・時期	歴 史 事 項	参 考
暦応4(1341)	興國2) 小国政光等、蒲原津で北朝軍に攻められた。 *暦応4年、南朝方小国・栗田氏蜂起の際、憲頭にたいし「御教書」によつて下団したことを保証する譲文を提出した。	『長尾氏の研究』 勝守すみ著 *守護職
康永2(1343)	正月越後・出羽に南朝方蜂起り、憲頭越後へ、翌年7月鎌倉に還る。 幕府、憲頭に命じて小泉庄内の事を処分させた。 (建武4・暦応4・康永2・3年の南朝方討伐を實して) 奥山庄を長尾景忠に与えた(守護代)。	
觀応元(1350) 文和元年	*憲頭に「上庄内關所未給分」を「当國守護領不足分」に充てた。 觀応の擾乱-義宗に加担した憲頭は、3年越後に逃れて、南朝方に通じ、貞治2年まで越後に止まる。	越後守護職宇都宮氏に移る 『越佐史料』 『長尾氏の研究』 勝守すみ著
文和2(1353) 延文4(1359)	11月、小国氏は新編割(分水)で北軍と戦う(正平8年) *憲頭は北朝方に帰順したらしい。翌年赤田城・上田城・妻有城(南朝方)を攻めた。奉1360『貞治の通補』	
貞治5(1366) 貞治6(1367) (注) 応安元(1368)	盛光、盛光神社合殿、八幡社(誉田別命) 貞治5年8月勧請(『小国町史』) 南魚沼谷寺碑板(自然石) -10/15・10/28・12/18(鈴) 真福寺碑板(「积迦三尊釋子貞治六月日 施主敬白」)-新発見 正平23年、南朝方なお魚沼にその戦力を残していたが、義宗の死、義治の出羽敗走によって終わる。	貞治-北朝年号 『越佐史料』
明徳3(1392) 明徳4(1393)	南北朝合体(後醍醐の任国へ守護大名) 7/16幕府、越後守護房方に小国三河守と白河兵部少輔入道の押領を停めて、国衙内「蒲原津・五十嵐保を上杉憲方代、景実に打渡す」よう命じた。一千谷郡に官衙のうち下地知行か? 所職知行か? (勝守すみ)。	
亨徳3(1454)	黒龍某・小国某の勢力が、京都で守護に謀反を企て、失敗して京都から逃げる。 *上田庄三分一、千谷郡官衙衛、蒲原津・五十嵐保妻有庄=所領・山内家の権力統合。	『長尾氏の研究』 勝守すみ著 『南朝方小国氏の終焉?』 『三浦と田中泰氏文書』 『新潟県史』資料編4) 永文乱(1439) 永享乱(1428)
戦国時代		群雄割拠時代
文明3(1472)	「応仁・乱」応仁元年(1467)~永禄11年(1568) 毛利房朝、上杉房定に反抗す。房朝の甥重廣にこれを討たせた。償して吉谷・高梨等の地を知行させた。	『越佐史料』 上杉家臣小国氏の変遷
文明9(1478)	12/27日房定、小国領内の地(尾山分、諫訪実右衛門知行分、29日)を毛利重廣に知行、加給した。(刈羽郡へ編入された)	永正乱(1509) 『吉田町史』資料1
永正15(1518)	「一貫文、あちころうにんをくに殿と申候人、あっちらようゑちせんのこうまでおくれ候、ろせんのふんとしてあひわなし候」 (「一貫文、越後浪人小国殿と申候人、越中より越前の国府まで送られ候、路銭の分として相度し候」)	
天正8(1580) 同年5月18日	小丸山古墓、宝鏡印塔此切迄の間。 *小国三河守重頼、(子)石見守実頼天神山城に居城。?	小丸山火葬墓群
天正9(1581) 天正16(1588)	上杉景勝、黒龍・小国を仕置きの為巡視して届障の途中、大面において故景虎殘党の要挙するものを撃破。6月9日天神山城将小国実頼、景勝に助けを請う。安部二介を救援に遣ます。 小国下地分の内、石橋名…石橋村おさごのへ(村長殿へ) 小国下地分の内、石橋名…佐藤どのへ	『越佐史料』 『越佐史料』
葬送墓制の変遷		
绳文時代	屈葬・伸展葬(十抗墓・配石墓・石棺墓・洞穴墓・岩陰墓・家屋ぼ・再葬墓・合葬墓と重葬墓・幼児墓葬被り墓と抱き石墓)…住居内・周辺・特定地・特定方向への列状埋葬など。	細分割検討略 延命寺ヶ原遺跡
弥生時代	*土葬例、火葬例、再葬例… *基本的には縄文時代と変わらない。 (上抗墓・地ト配石墓・石棺墓・洞穴墓・岩陰墓・方形周溝墓・支石墓・壇棺・木棺・石棺・幼児棺・再葬墓)…身分階級による内容の変化が大きい	土器・石器
古墳時代	(土抗墓・方形周溝墓・石積塚一円・方・中方双方・中円双方・上円下方・前方後円・木棺・石棺・陶・円筒・坪棺・粘土櫛・砾櫛・木炭櫛・堅穴式石室・横穴式石室・地下横穴式坑・横穴…) *6C中葉(538)~仏式葬制・墓制への変化。	『薄荷令』大化2(646)

年代・時期	歴 史 事 項	参 考
文武天皇 4年 (700)	僧道昭が亡くなった時「弟子等遺骸を奉じ、栗原において火葬とす。天下の火葬はこれに従って始めとする」以来、代々の天皇家の火葬が常とされた。 * 聖雲 4 (707) 「造御電司」養老 5 (721) 造電火葬 * なお一般市民の「野に屍を曝し…」 「百濟より仏像・経巻を貢獻す」 「百濟より造寺工が渡來した」	『統日本紀』 墳墓の出現 墓誌・石室上葬・火葬
欽明天皇～ 敏達天皇 崇峻天皇～	蘇我馬子・聖德太子と共に難波に四天王寺を建立した。仏教興隆の中で法興寺・法隆寺等が建立され、推古天皇(593～628)の末年までに46ヶ寺に達した。 * 薄葬令 (842)、怨靈思想…密教～淨土思想…人魂を鎮魂する思想が高まつた。 ? 仏滅2000年の「未法思想」初年。 高塚の墓（土坑墓・配石墓・ヤグラ（横穴墓）一五輪塔、宝塔、多宝塔、宝篋印塔、無縫塔…）墓石・供養塔など * 一般民衆は圧倒的な土葬制（土饅頭・墓印・木、石、芝…）	墓寺と寺墓 * 浦田遺跡 須恵・土師 壇立柱建物跡 火葬墓 上葬墓
平安時代 (800～1200) 永承 7 (1052) 鎌倉時代～	「種子 釈迦三尊 貞治 6 月日 施主敬白」（貞治 6 年・1367）	* 真福寺板碑
南北朝時代 (1333～1392) 戦国時代 文安元 (1444)	十三仏札拌流行、室町時代の始めより禪密両教の間に行なわれるようになつた。 * 室町時代から江戸初期、儒教・朱子学の勃興により、身体髪齒を父母に受け、火葬して灰燼となすは倫理に反する。…火葬は蛮俗として從来の葬法を改め、上葬の風が起つた。	延命寺ヶ原遺跡 * 塚群・土坑群 * 小丸山古墓群遺跡
天文 18 (1549)	キリシタン禁制。「寺請制度」（慶長 18 ? 19 年説？）	
江戸時代	高塚の墓と配石墓（一般民衆の近世墓地の殆どが配石墓）。* 火葬墓も多かつたが、圧倒的に土葬墓制が行なわれた。篠藩もまた土葬であり、繩文時代以来の伝統的な穴掘、山作り（山びシャイ）・山茶など現在にも連続する。 * 水戸藩 - 火葬禁止令を出して葬礼を儒教式に習つたという。	初七日・新盆・配石
寛永 11 (1634)	「寺請制度」（家臣制）キリシタン禁止令。 寛永12年「寺社奉行」の設置。	『江戸幕府の宗教統制』圭室文雄著 「宗門改」
寛文期 (1661 ～72)	幕府の寺院整理…特に保科正之（会津藩） - 山崎権蔵・池田光政（岡山藩） - 熊沢了介、徳川光圀（水戸藩） - 儒教系水戸学）が積極的に推進した。 * 神社整理～神体の変更、神社を神官の手に（水戸藩の「一村一領守制」の推進。 * 権家制 = 個人入信 ⇒ 家臣位 ⇒ 五人組単位へ制度化。（寛永 3 、寛文 7 、延宝 3 、元禄 4 ）上葬・武石等 五輪塔（供養塔造立の増加）。	廃仏論の展開 『江戸幕府の宗教統制』圭室文雄著 葬祭～祈禱へ * 浦田遺跡 上葬墓群～墓石調査
五輪塔確認		
慶応 4 (1868)	3 月「廃仏毀釈令」 - 神祇官の再興および太政官布告による神仏判然令によつて神道・佛教政策（佛教抑圧、排斥、破壊運動）へと大きな変化をもたらした「火葬令」、墓地集合の整理…地租改正令（1873） * 火葬の禁止、「臭い、煙 - 火葬は古來の遺風を傷つける…」として禁止した。太政官布告 - 火葬禁止令の解除。以後自由になる。	首なし地蔵尊今に残る
明治初年～ 明治 6 (1873)	火葬場設置について通達「人家遠隔地に設置すべき旨…」	新潟県令楠木正隆
明治 8 年… 明治 9 年… 明治 15 年… 明治 17 年… 明治 30 年… 昭和 23 (1948)	「火葬場取締規則」 - 火葬場の場所の限定 「墓地及び埋葬取締規則」 - 墓地及び火葬場を限定区域とした（太政官布達 25 号）。 「火葬に関する法律」（第 93 号） 「墓地、埋葬に関する法律」	新潟県令永山盛輝 * 浦田遺跡・明治 16 年半銭 * 浦田遺跡墓地・大正 3 年埴墓地籍解除

引 用・参考文献

1. 『縄文時代の延命寺ヶ原』発掘調査報告書 小国町教育委員会 (1969)
2. 『小国町史』本文編 小国町史編集委員会 (1976)
3. 『日本土器事典』大川・鈴木・工楽編 雄山閣 (1996)
4. 『北越考古学』第8号 北越考古学研究会 (1997)
5. 『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院 (1999)
6. 『御館』発掘調査報告書 小国町教育委員会 (1985)
7. シンポジウム「北陸の古代土器研究の現状と課題」報告編
- 「越後・佐渡の古代土器 - 8~10世紀を中心にして」坂井秀弥 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 (1988)
8. 『北陸古代土器研究』創刊号・第6・7号 北陸古代土器研究会 (1991, 97)
9. 『歴史学と考古学』「律令期の須恵器系譜」
- 越後西南部における二つの系譜をめぐって - 坂井秀弥 (抜刷) 真陽社 (1998)
10. 『金屋跡』発掘調査報告書 新潟県教育委員会 (1985)
11. 月刊『考古学ジャーナル』No.339 ニュー・サイエンス社 (1991)
12. 『新潟考古』2号 「佐渡の須恵器」坂井・鶴間・春日 新潟県考古学会 (1991)
13. 『新潟考古学談話会会報』9号 「古代の荷札木簡について」水沢幸一 新潟考古学談話会 (1992)
14. 『歴史研究』第410号 特集 木簡の謎 新人物往来社 (1995)
15. 『結城野村治概表』上坂亭作編 (1891)
16. 『上小国村郷土誌』上坂亭作編 (賛写版) 小松家文書 (コピー) 大正年代 (復刻版) (1976)
17. 『刈羽郡案内』全 関 甲次郎 吉川弘文館 (1979)
18. 『古事類苑』禮式部二、泉質部 (普及版) 築間叢書240 (1981)
19. 『日本の葬式』井之口章次 卷町教育委員会 (1985)
20. 『城願寺・坊ヶ入墳墓』埋蔵文化財発掘調査報告書 長岡市教育委員会 (1986)
21. 『三賀製造跡』- 第1次発掘調査- 人法輪閣 (1990)
22. 『大法輪』平成2年7月号 江戸遺跡研究会 (1992)
23. 『考古学と江戸文化』江戸遺跡研究会51回大会 (発表要旨) 雄山閣 (1995)
24. 月刊『考古学』53号 「東京都池之端七軒町遺跡」同調査团 ニュー・サイエンス社 (1996)
25. 月刊『考古学ジャーナル』No.477 特集 江戸の墓 柏書房 (2001)
26. 図説『江戸考古学研究事典』 湯沢町教育委員会 (1976)
27. 『伝・泉福寺遺跡 - 石臼中世備蓄古鉢の報告書 -』 青木書店 (1981)
28. 『地域と民衆 - 國家支配の問題をめぐって -』 小千谷市教育委員会 (1982・83)
29. 『竜ヶ池観音堂塚群発掘調査報告書』 I・II 新潟史学会 (1983)
30. 『新潟史学』16号 「越後國中世庄園の成立」荻野正博 新潟史学会 (1987)
31. 『新潟史学』20号 「越後・岡南北朝動乱史の歴史的前進」赤沢計真 新潟史学会 (1988)
32. 『新潟史学』21号 「上杉氏の越後国入部と対応の擾乱」赤沢計真 山崎正治 (再版) (1989)
33. 『柏崎刈羽の古城址』第1集 (小国篇) 長岡郷土史研究会 (1990)
34. 『長岡郷土史』27号 「天神山城と小国氏」鳴海忠夫 新潟史学会 (1997)
35. 『新潟史学』38号 「上野国新田氏の越後入部と在地領主の形成」赤沢計真 岩波書店 (1972)
36. 『日本歴史』248・249 「板碑源流考」「板碑研究の課題」千々和実 名著出版 (1978)
37. 『長尾氏の研究』勝守すみ編著
38. 『板碑』埼玉県立歴史資料館編
39. 『板碑の総合研究』坂詰秀一編 名著出版 (1981)
40. 『日本歴史体系』2(中世) 井上・永原・児玉・大久保編 柏書房 (1983)
41. 『歴史研究』第419号 特集「板碑の謎」 山川出版社 (1985)
42. 『へんなか』第17号 -雪国への文化を語る- 特集「越後小国氏の系譜」 新人物往来社 (1996)
43. 『小国芸術村』友の会 (1996)

図 版



▲発掘調査範囲

●表土堆土状況



●表土堆土状況

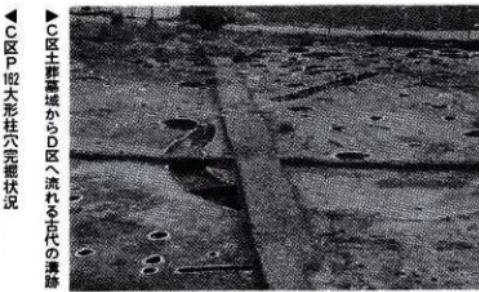
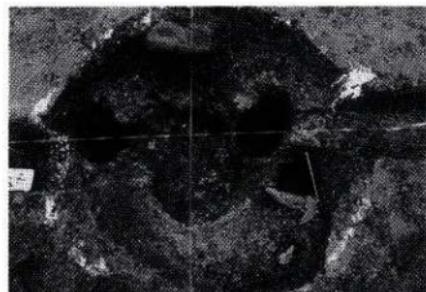
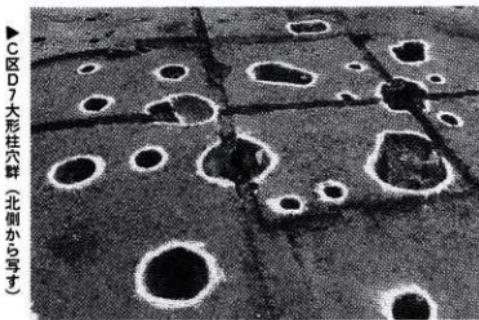
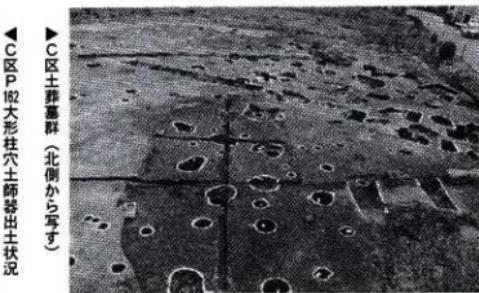


●発掘状況

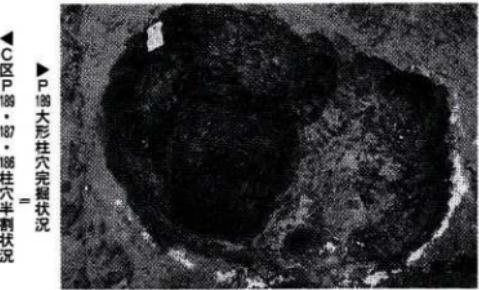
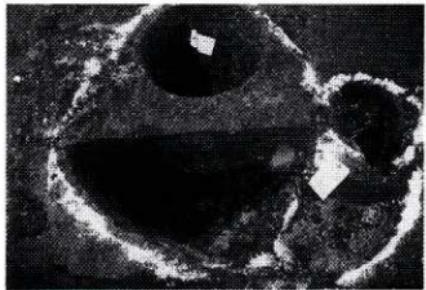
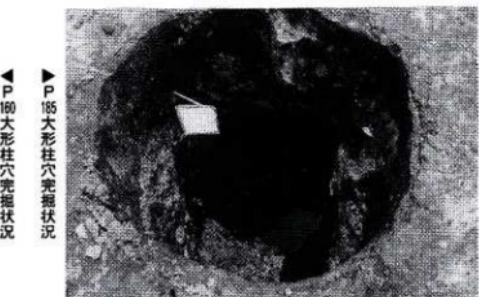
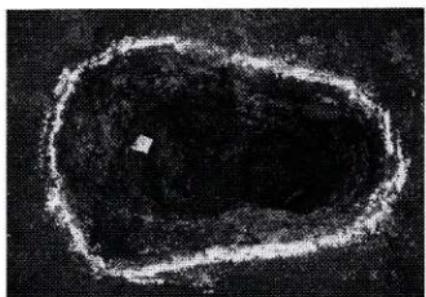


●土葬墓調査状況

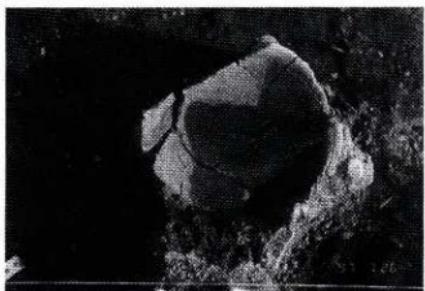
写真図版1 蒲田遺跡の環境と発掘状況



写真図版 2 遺構検出状況(1)



写真図版 3 遺構検出状況(2)



土器の出土状況

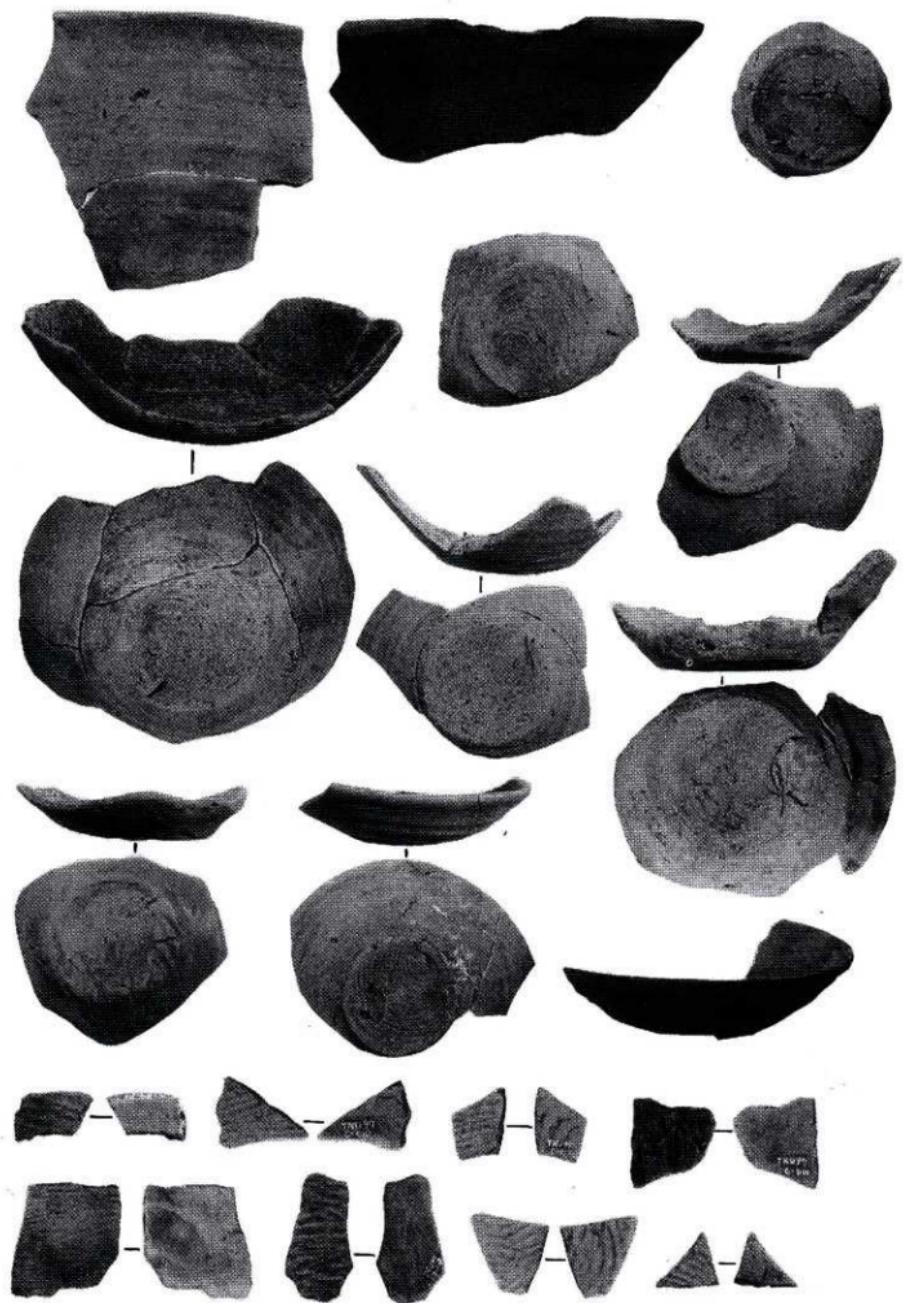


土器の出土状況

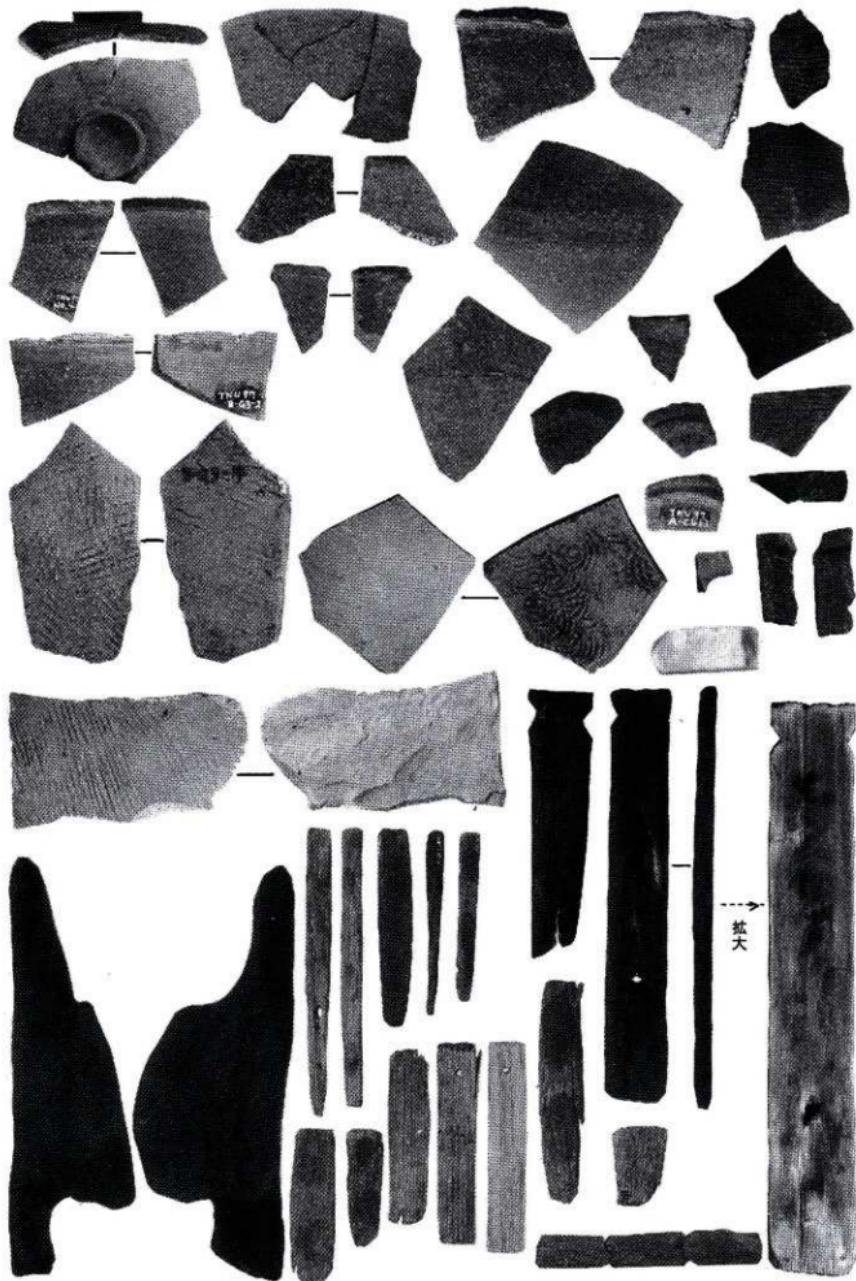


須恵器の出土状況





写真図版 5 土器



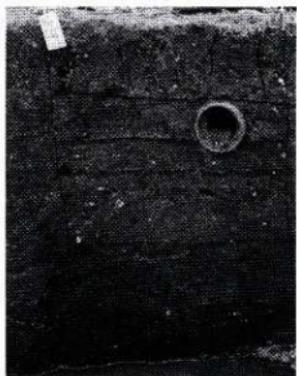
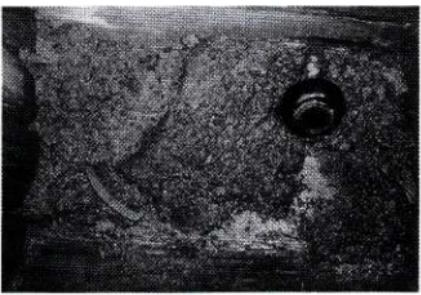
写真図版 6 須恵器・磁石・柱根・木簡



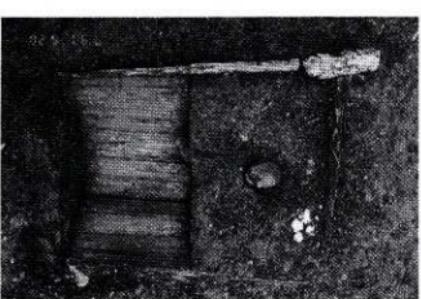
▲土葬墓坑群出土状況
古代の溝跡



▲56号墓場棺・挽・梯・焼羽様



▲B区A・B7列土層状況と水田暗渠排水施設

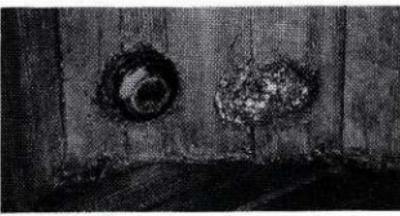


▲発掘された人骨の供養塔(右端)





▲ 17号墓棺・檢・枕



▲ 17号墓棺・檢・枕



▲ 23号棺阿弥陀佛出土



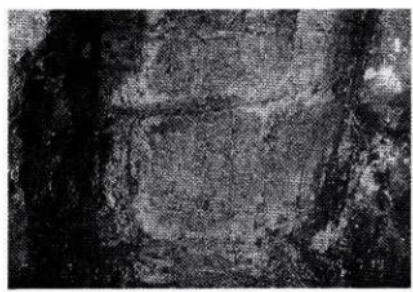
▲ 56号桶棺



▲ 31号桶棺・檢・枕・焼跡様



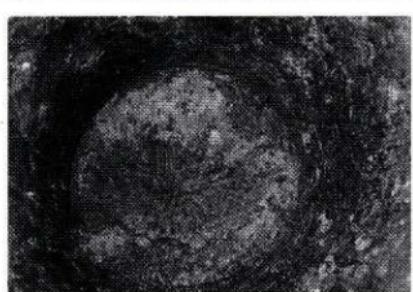
▲ 60A号墓棺に被せた山丘の骨



▲ 24号桶棺の縁の痕



▲ 60C号墓棺

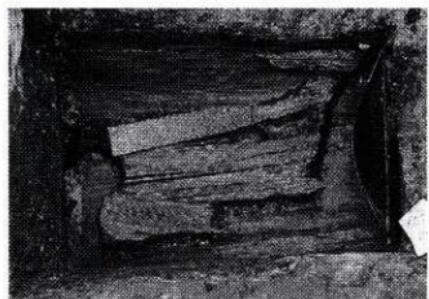


▲ 26号駆桶棺のタガと縄の痕



▲ 20号桶棺のタガと縄の痕

写真図版 8 C区上葬墓出土状況(2)



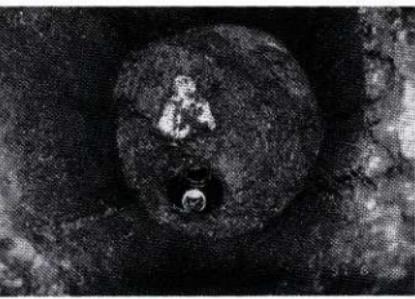
▲32号桶棺B-A重葬状況
32号桶棺上半分の側板もある



▲66号桶棺堅理葬蓋の上に石
▲62号桶棺完掘状況



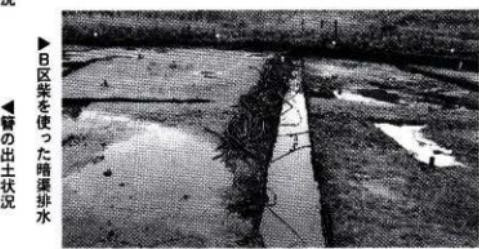
▲66号桶棺堅理葬・枕・枕・蓋
▲69号桶棺・手前は下の角椎墓跡



▲59号桶棺裏(唯一)出土状況
▲26号桶棺堅理葬



写真図版9 C区土葬墓出土状況(3)



▲C-F7湯飲み陶器出土状況
▲18号墓桶推重複状況

▲C区茶碗出土状況
▲50・52A・52B号埋葬墓完掘状況

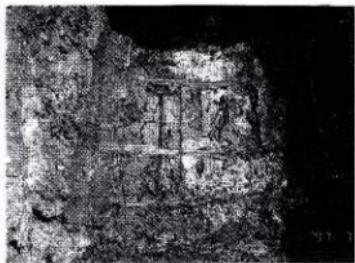
▲B区柴を使った暗渠排水
▲管の出土状況

▲B区竹筒の暗渠排水
▲寛永通宝出土状況

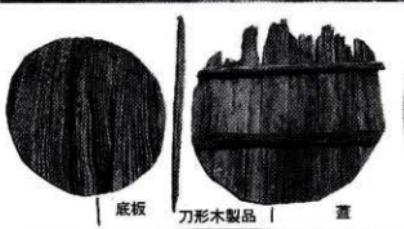
▲B区塙にパイプ・土管の排水施設
▲管出土状況



▲67号墓黒漆桶出土状況



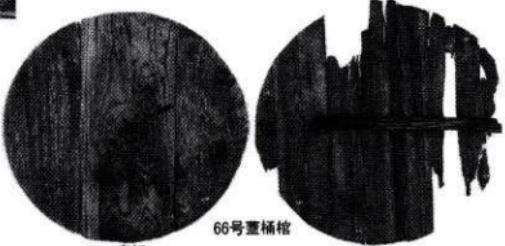
▲50号墓桶棺のタガの出土状況



底板

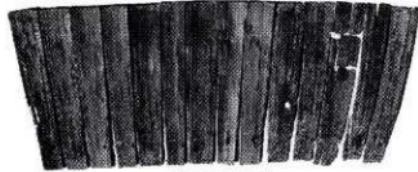
刀形木製品

蓋



66号墓桶棺

蓋



▲56号墓桶棺側板

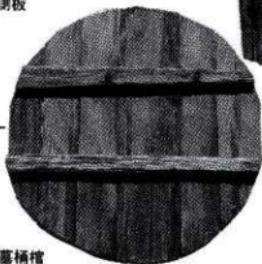


41号墓底板

蓋



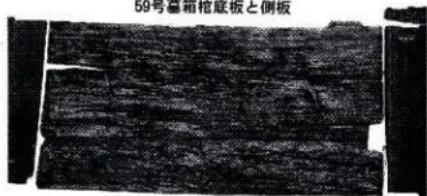
69号墓桶棺
復元状況と蓋



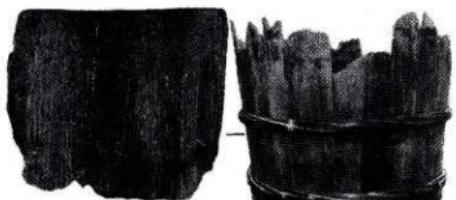
桶棺○印墨書

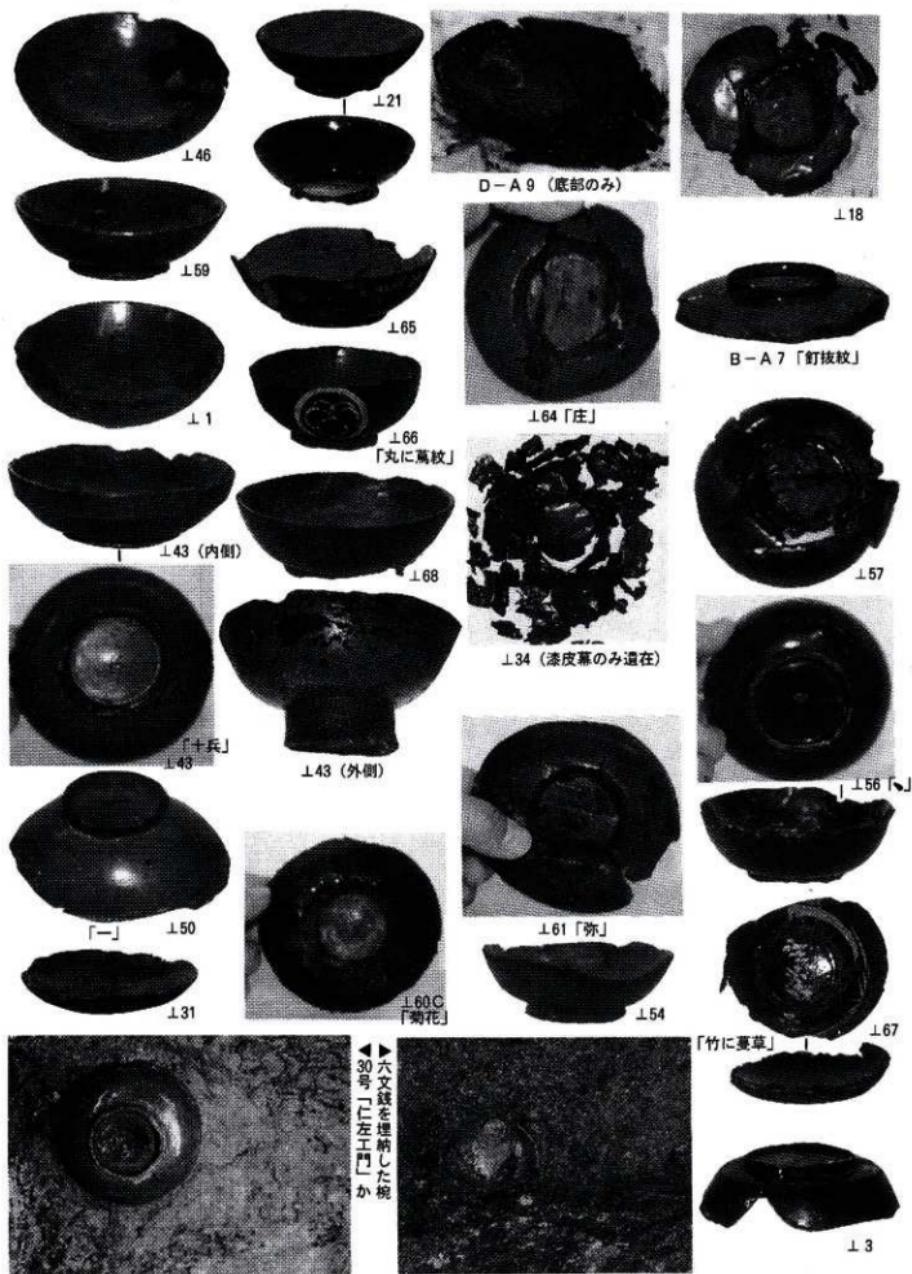


67号墓桶棺側板○印墨書



59号墓箱棺底板と側板





写真図版12 土葬墓に剖葬された椀（漆器）



写真図版13 上葬墓に副葬された陶磁器・土人形・砾石



23号墓出土



鳥型



櫛

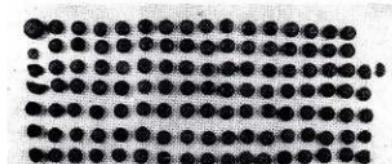


梳



木製品各種

0 5 10 15

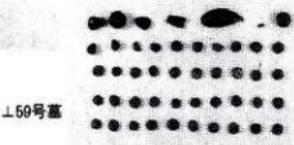


保存処理後の数珠

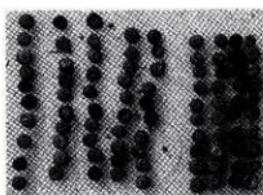


上62号墓

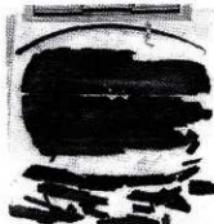
上59号墓



上17号墓



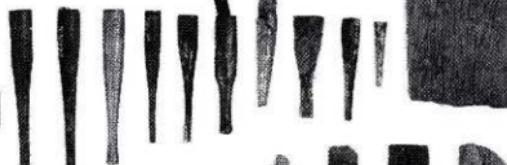
数珠



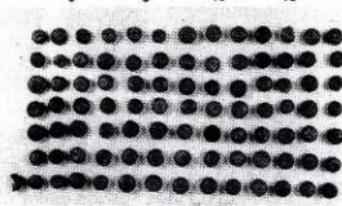
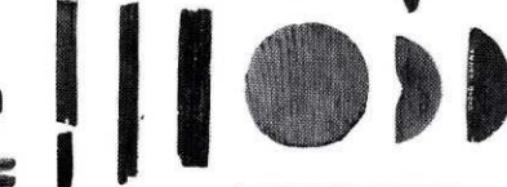
曲物



煙管



木製品各種

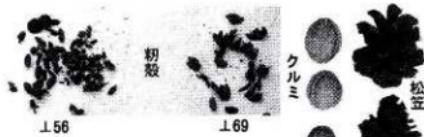




桃の種



クルミ



糊胶

上69

クルミ

松豆

クワイ
桔

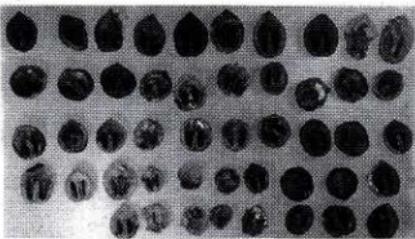
ウリ

田貝

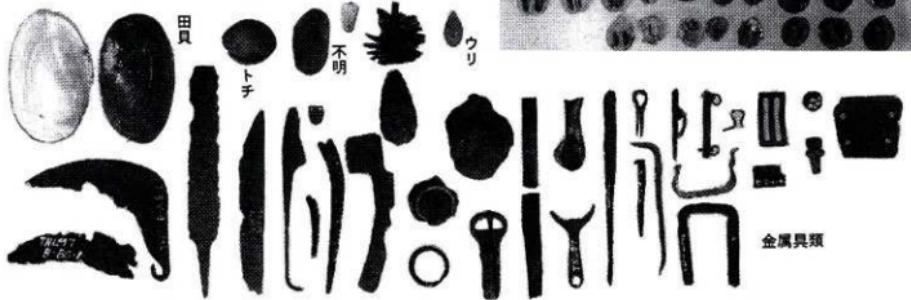
トチ

不明

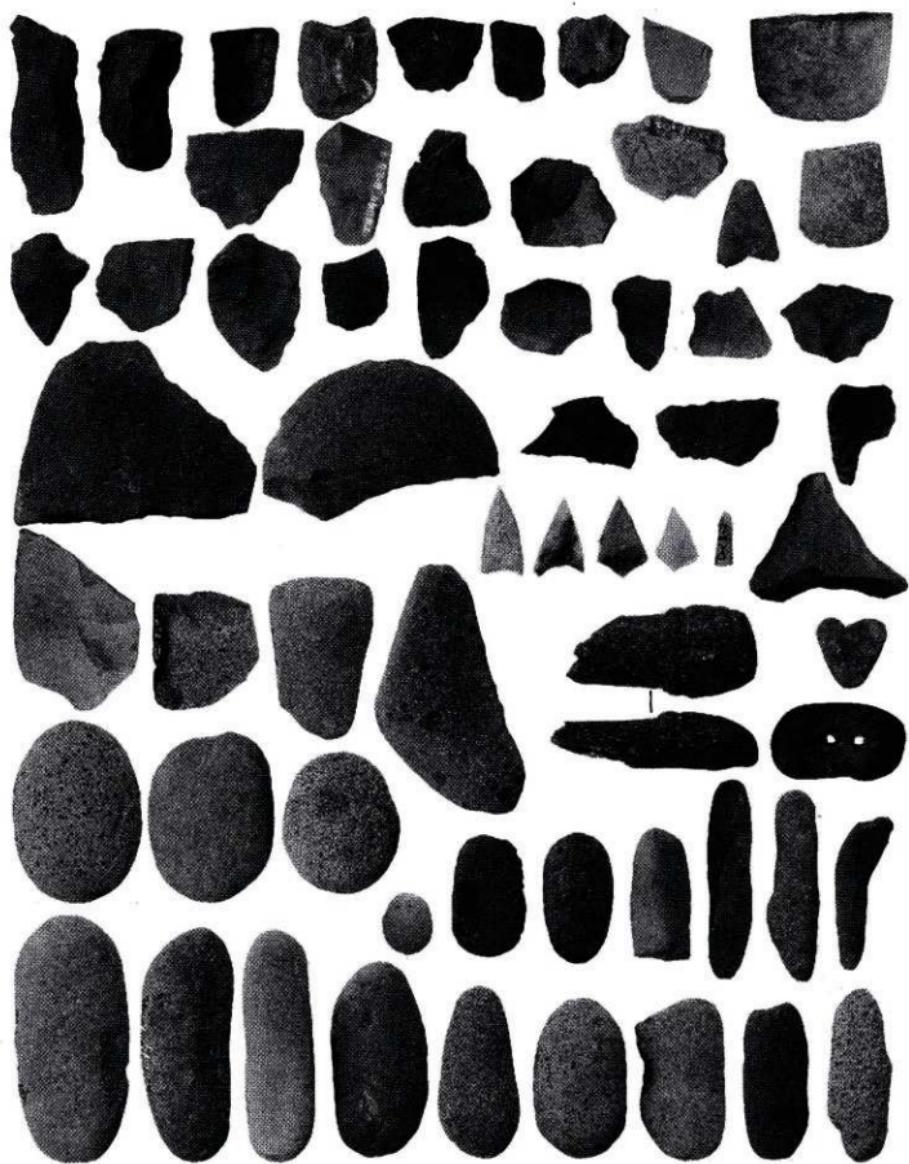
トコ



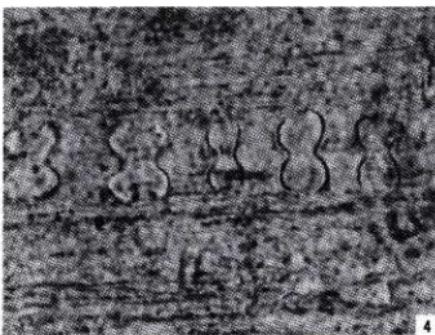
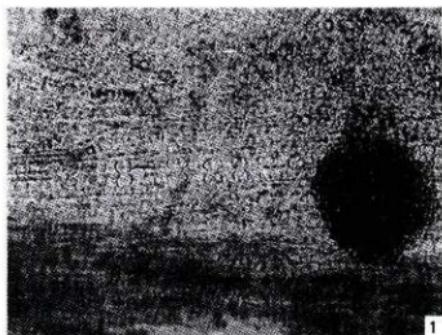
クルミ



金属具類



写真図版16 造橋外出土縄文時代の石器



50 μm
(1, 3, 4)

1 cm
(6)

50 μm
(2)

1 cm
(5)

1. イネ属短細胞列 (試料番号 5 A) 2. イネ属短細胞列 (試料番号 5 A)
3. イネ属短細胞列 (試料番号 5 A) 4. イネ属短細胞列 (試料番号 6 A)
5. イネ (試料番号 1) 6. カ牛 (試料番号 7)

* 1 - 4 : 灰像 5 - 6 : 種実遺体



写真の説明：

1：下顎右側側切歯の唇側面観。2：下顎右側犬歯の唇側面観。3：上顎左側第1小臼歯の咬合面観。4：上顎右側第1大臼歯の咬合面観。5：下顎左側第1小臼歯の咬合面観。6：下顎左側第2小臼歯の咬合面観。7：下顎左側第1大臼歯の咬合面観。
すべての写真が同倍率で、スケールは5mmである。



写真図版19 原小堀居平遺跡出土遺物（須恵器・土師器・縄文時代石斧）



▲小丸山開墾地風景（そばの花）（昭和15年）

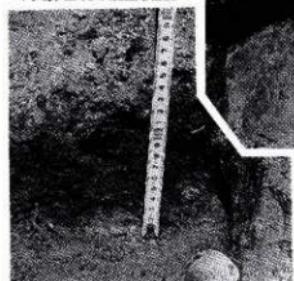


►小丸山の現況（平成10年）



►宝篋印塔笠部二基
(七日町土橋墓地古墓)

▼火葬墓坑の焼土状況▶



▼自然石板碑（真福寺境内）



報告書抄録

書名	浦田遺跡発掘調査報告書					
刊行名	県営圃場整備事業関係発掘調査報告書					
シリーズ名	埋蔵文化財報告書	シリーズ番号	第3集			
編集者名	山崎正治(小国町文化財審議会委員)・池田亨(日本考古学協会会員)					
編集機関	小国町教育委員会					
所在地	〒949-5292 新潟県刈羽郡小国町大字法坂793番地					
発行年月日	西暦 2000年3月31日(平成12年)					
所収遺跡名	所在 地	コード番号		北緯		
		市町村	遺跡番号			
浦田 遺跡	新潟県刈羽郡小国町 人子太郎丸字浦田699番地他	76	61	37度		
				138度 16分 40秒 69秒		
調査期間	調査面積	調査原因				
97528-9786	2000m ²	県営圃場整備事業に伴う緊急発掘調査				
遺跡種別	土な時代	土な遺構	土な遺物	特記事項		
建物跡	平安時代	掘立柱建物・水路跡	須恵・土師・柱	木簡(文字不明) 仏像・土玩具		
土葬墓地	近現代	土坑墓群	錢貨・棺桶・蓋埋葬 墓・漆器陶磁器木器			
縄文遺物	縄文時代後晩期	遺構なし	土器・石器			



〈発掘調査参加者〉

小国町埋蔵文化財調査報告書 第3集

**県営圃場整備事業関係発掘調査報告書
浦田遺跡**

2000年3月25日印刷 編集 池田 幸（日本考古学協会員）

2000年3月31日発行 発行 小国町教育委員会

住所 〒949-5292

新潟県刈羽郡小国町大字法坂793番地

TEL. 0258(95)3111（代表）

FAX 0258(95)5043

印刷 あかつき印刷株式会社

住所 新潟県長岡市新庄4-4-7

TEL. 0258(46)9993